大学昇格と簡文館

大学昇格への道のり

1886（明治19）年11月4日、大阪西区京町堀の願宗寺で創立した関西法律学校は、1903（明治36）年に初めて自前の校舎を西区の江戸堀に建て、その3年後には北区の福島に新たな学舎を建設した。この時点で本学は、すでに「関西大学」の名称を使用していたが、法律的には専門学校令に基づく専門学校であった。

1918（大正7）年、文部省は大学令を公布し、帝国大学と同等の資格を持つ公立と私立の大学設立を認めた。本学が大学令による大学へと昇格するためには、社団法人から財団法人への組織変更とともに、広大な校地や学舎など、教育施設の充実が不可欠であったが、福島学舎の土地は手狭であった。そのために新校地探しを続けた結果、1920（大正9）年に大阪府三島郡千里村の土地1万5000坪弱を入手することができた。

▲1922（大正11）年頃の関西大学。現在の正門前から第一学舎方面を望む。「関西大学」の白い看板付近が現在の正門。

▲山岡順太郎（1866～1928）

昇格の実現

大学昇格のためには多額の資金が必要であった。法学部と商学部の2学部設置を計画していた本学の場合、文部省へ納める供託金は60万円にのぼり、その資金を調達するため、大阪財界の巨頭、山岡順太郎（数々の大企業の社長や重役、さらには大阪商業会議所の会頭も務める）を会長とする関西大学教育拡張後援会を設置し、実業界の援助を仰ぐべく積極的な募金活動を展開した。

大学設立認可申請書は1921（大正10）年2月5日付で文部省に提出され、予科校舎の建築工事も同年7月に始まった。

千里山学舎で初めての建物となる予科校舎が、翌1922（大正11）年4月下旬に完成して間もない6月5日、本学はついに悲願である大学昇格を果たした。これで名実ともに真の大学となったのである。

キャンパスの整備～図書館の竣工

山岡順太郎は総理事（のちに学長も兼務）となり、新しい大学の理念として「学の実化（じつげ）」を提唱した。①学理と実際との調和　②国際的精神の涵養　③外国語学習の必要　④体育の奨励の四つからなるこの理念は、その後、本学の学是として定着する。

山岡総理事は教授陣の充実や海外派遣留学生制度の確立などに力を注ぎ、その一方で、大学本館など学舎の整備や、体育を奨励するために、グラウンドやクラブハウスをはじめとする運動施設も充実させていった。大学昇格にともなう一連の建設工事で、最後に竣工した施設が現在簡文館と呼ばれている図書館であった。

大学に昇格して間もない1922（大正11）年9月11日、第2学期始業式の式辞で山岡総理事は「そもそも図書は大学の生命である。」と述べており、図書館の建設は、大学昇格を果たした関西大学にとっては重要な施策であった。

▲空から見た昭和初期の関西大学。グラウンドを取り巻く高台に、奥から図書館（1928年竣工、現簡文館）、大学本館（1927年竣工）、予科校舎（1922年竣工）、クラブハウス（1926年竣工）が建つ。

簡文館のあゆみ

- 1922（大正11）年　大学昇格
- 1926（大正15）年　図書館設計案完成
- 1928（昭和 3）年　図書館竣工
- 1948（昭和23）年　新制大学発足
- 1955（昭和30）年　村野藤吾設計の図書館増築工事竣工
- 1978（昭和53）年　円形図書館1階のピロティ部分を事務室に改築
- 1985（昭和60）年　総合図書館開館、旧図書館を「簡文館」と命名する、考古学等資料室、東西学術研究所、人権問題研究室が移転
- 1994（平成 6）年　関西大学博物館開館
- 2005（平成17）年　書庫解体工事
- 2006（平成18）年　なにわ・大阪文化遺産学研究センター棟竣工　年史資料展示室を開設
- 2007（平成19）年　国の登録有形文化財（建造物）として登録
- 2012（平成24）年　耐震改修工事を実施
- 2018（平成30）年　大阪府指定文化財に指定

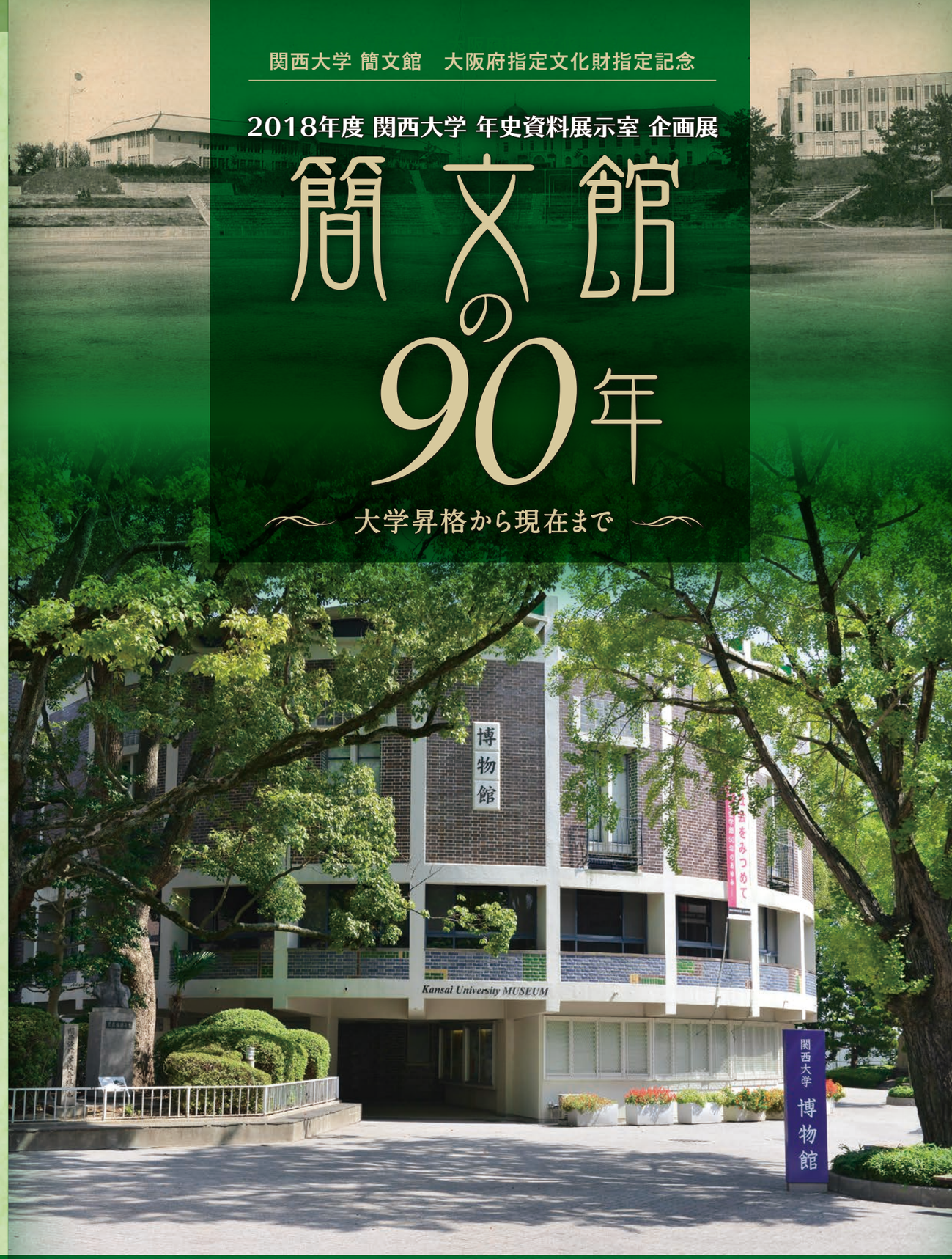
関西大学年史編纂室　〒564-8680　大阪府吹田市山手町3-3-35　TEL：06-6368-1062（直通）
URL：http://www.kansai-u.ac.jp/nenshi/　E-Mail：nenshi@ml.kandai.jp

関西大学 簡文館　大阪府指定文化財指定記念

2018年度 関西大学 年史資料展示室 企画展

簡文館の90年

大学昇格から現在まで



関西大学簡文館　大阪府指定文化財指定記念
2018年度 関西大学 年史資料展示室 企画展

簡文館の90年
大学昇格から現在まで

簡文館は、1922（大正11）年の大学昇格による一連の建設工事のなかで、
1928（昭和3）年に図書館として竣工し、本2018（平成30）年、90年を迎えた。
簡文館は、1928（昭和3）年に建設された矩形の建物と、1955（昭和30）年に増設された円形の建物からなる。
1928（昭和3）年竣工の図書館は、昭和初期の大学図書館建築として代表的なものであることや、
1955（昭和30）年増築の円形図書館は、建築家村野藤吾の代表作の一つと目される建築であることが評価され、
簡文館は2007（平成19）年に国の登録有形文化財（建築物）として登録され、
本年、重ねて大阪府指定文化財に指定された。大阪府では、戦後の建築物として、大学の建築物として、
村野藤吾の建築物として、初めての指定となる。

1928（昭和3）年竣工の図書館

千里山キャンパスでの図書館建設工事は1927（昭和2）年6月に始まり、1928（昭和3）年4月に竣工、6月に開館した。完成した図書館は、地下1階・地上3階の閲覧室・事務室部分（現存建物）と、地下1階・地上6階の書庫部分からなっていた。

大学昇格当時の様子を伝える千里山キャンパスで最も古い建物であり、大阪府内の大学施設の中で最も古い建物でもある。

▲1941（昭和16）年頃の図書館

簡文館の見どころ ①

1928（昭和3）年竣工の図書館は、学内初の鉄筋コンクリート造の建物である。外観は、鋭くとがった塔の形を模した装飾用の付柱（ピラスター）が均等に配置され、その付柱の間に、縦長の窓が並ぶ。2階と3階の窓の境目は、はざま飾り（トレーサリー）で装飾する。階段室は塔屋とし、全体的に垂直性を強調したゴシック様式の意匠を持つ。外壁は、白いモルタルを箒やササラで掃き付けた、凹凸のあるドイツ壁とする。

建物内部は建物を支える梁が露出し、その梁には面取りが施されている。廊下や階段は1.5メートルほどの高さまで布目タイルを貼り、その上部から天井までは漆喰を塗る。壁と天井の境目は、漆喰による簡素な廻り縁で装飾する。主要な部屋につながる扉は上部を半円形とし、ぶどう模様のレリーフを飾っている。閲覧室は天井の高い大空間で、柱や壁に板材で腰壁をめぐらす質素なしつらえで、堅固な建物であるが軽やかな印象を与えている。

▲垂直性を強調した図書館外観

▲廊下や階段を飾る布目タイル

▲アーチ型の梁や天井の廻り縁で装飾された階段室

▲1955（昭和30）年頃の図書館閲覧室

▲現在は博物館特別展示室となる

▲ぶどう模様のレリーフ

円形図書館の増築

関西大学は、学制改革により1948（昭和23）年に新制大学として認可を受け、法・文・経・商の4学部を設置した。その後、学科の増設や新制大学院の設置が続き、図書館の蔵書が急激に増加していった。そのため、創立70周年記念事業の一つとして、図書館の増築が計画され、1955（昭和30）年10月に竣工した。設計は本学の学舎設計を数多く手掛けた村野藤吾が担当した。この工事によって、もとの図書館の西側に、3階建の円形図書館と6階建の書庫が増築された。

▲増築された書庫（左）と円形図書館

簡文館の見どころ ②

増築された円形図書館の外観は、均等に並んだ柱が壁面を区切り、その柱の間には、焼成時に塩水を使うこげ茶色の塩焼きタイルを貼る。2階のバルコニー部分は塩焼きタイルのほかに、青・緑・黄のタイルを用いてモザイクが施されており、表情が豊かである。

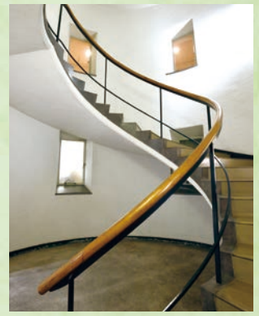
1階はピロティで、その中央にはなめらかな曲線が印象的ならせん階段があり、2階はらせん階段を囲んで部屋が並ぶ。3階は開架閲覧室で、天井が高く、ゆったりとした空間である。縦長の窓が8つ並び、窓の上部はガラスブロックがはめ込まれている。さらにその上には横長の高窓が18ある。円形のガラスブロックによる天窓もあり、閲覧室には多様な窓から光が差し込んでいた。

▲現在の簡文館

▲2階バルコニーのモザイク

▲円形図書館の開架閲覧室

▲現在は博物館常設展示室となる


▲らせん階段

建築家
村野藤吾
（1891-1984年）

佐賀県唐津市に生まれる。早稲田大学理工学部卒業後、大阪を本拠地として活躍する。旧そごう大阪店（現存せず）、新歌舞伎座（現存せず）、梅田吸気塔など大阪の都市景観に欠かせない建築物を設計した。また、渡辺翁記念会館（宇部・重要文化財）、世界平和記念聖堂（広島・重要文化財）、尼崎市庁舎、カトリック宝塚教会、日生劇場（東京）など、全国各地に300を超える作品を残している。1967（昭和42）年、文化勲章を受章。

関西大学の千里山キャンパスでは、1949(昭和24)年から約30年の間に40近くの建物の設計をしている。施設の更新により失われたものも多いが、約半数の施設が現存している。

▲簡文館前の村野藤吾